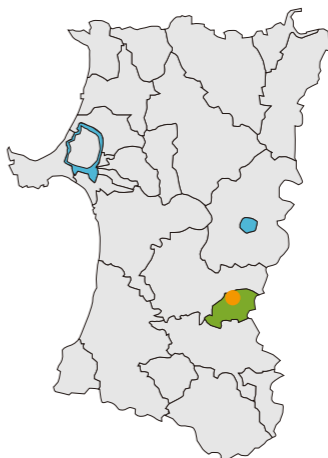


美郷町本堂城回地区

守り続けたい、
人々を繋げる伝統

導入することで稲ワラの収穫が難しくなり、鍾馗様の製作に無理が出てきたことから中断することもあったようです。

美郷町本堂城回



鍾馗様が祀られている本堂城回地区上空
中上の緑の広場が城跡



秋田県南の美郷町本堂城回地区に本堂城跡があり、樹齢500年以上にもなるといわれているケヤキがある。そのケヤキに抱かれるように疫病を追い払う神様とも言われている大きなワラ人形「鍾馗様」が祭られています。少し怖い顔でにらみを利かせている姿は、この地域の暮らしをずっと見守り続けているようです。

かつては隣地区との村境である矢鳥川の南側にあったようです。(菅江真澄の画より)その川の水の流れが変動し安定しないことから、城跡のケヤキの下へ祀ることになったようです。鍾馗様は、春の田植え後と秋の収穫後に講中(講を組んで、神仏にお参りする人々)持ち回りで宿になり、組み上げ、胴体を集落の若い衆に背負わせ城跡まで運んだそうです。若い衆は鍾馗様を背負うことで一人前と認められている、嫁をもらうことを認められたと言われているそうです。

1975年(昭和50年)頃からは、鍾馗様を作るのに必要なワラが、稲刈りにコンバインを

しかし、1989年(平成元年)本堂城回集落の旧(館間)、(北館)、(西館)の三組合を一本化して新たに城回集落組合を結成したのを機会に、鍾馗様の建立を再現しました。製作は毎年田植えの後に行われます。材料になる稲ワラは秋の稲刈りの際にコンバインと手作業で確保し、保管しておきます。高さが4メートルほどの大きな体の鍾馗様なので、80束くらいは使うそうです。鍾馗様の体のパーツごとにそれぞれ役割があり、頭を作る人、腕を作る人、足を作る人で分担し、最後はみんなで胴体を組み立て、それぞれのパーツを組み上げて完成させます。地区の人々が総出で半日ほどはかかるそうです。

伝統文化の継承である鍾馗様の製作指導に長年尽力をした進藤晃成氏が平成30年に他界。進藤氏の志は、共に歩んできた地域の同志に受け継がれることになりました。本堂に素晴らしい地域の絆だと思えます。

昔はこのような鍾馗様が地域各所にあつたと聞きました。時代とともに継承されることがなくなり、途絶えてしまうことが多いい中、美郷町の本堂城回地区の人々の「地域を守ってくれる鍾馗様」を作り続ける姿に感動します。



稲ワラをまとめる作業

頭のつの部分を作っています

胴体のパーツ作り



城跡のケヤキ下で作業されます

ワラを編んでいく

胴体に頭と手や足がつけました



胴体の背部分をつくる作業は大変

いよいよケヤキに祀ります

顔をつけて完成間近



秋の収穫と同時に稲ワラを確保します



稲ワラは乾燥がたいせつです
手作業が続きます

